

経済学史 (2019年度前期)

第6回その1: 新古典派経済学——限界革命

担当者: 佐々木 啓明*

*E-mail: sasaki@econ.kyoto-u.ac.jp; URL: <http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~sasaki/>

——新古典派経済学——

● 限界革命

新古典派経済学の誕生は1870年代のヨーロッパ
マルクスの『資本論』第1巻は1867年

新古典派経済学は、3人の人物によって開始された
→ ただし、3人は当初、お互いの存在を知らなかった

カール・メンガー (Carl Menger, 1840–1921)
オーストリアのウィーン大学

レオン・ワルラス (Léon Walras, 1834–1910)
スイスのローザンヌ大学

ウィリアム・スタンリー・ジェヴォンズ (William Stanley Jevons, 1835–
1882) イギリス

メンガー 『国民経済学原理』 1871 年

ワルラス 『純粹経済学要論』 1874 年と 1876 年の 2 分冊

ジェヴォンズ 『経済学の理論』 1871 年

古典派からマルクスにかけての労働価値説とは異なる, 新しい価値論 (価格論) を提起した.

→ 限界効用の理論

古典派では詳しく展開されなかった「市場」についての分析が精緻に行われるようになっていった

かれら 3 人による限界原理の同時提唱を, 限界革命と呼ぶ

●3 大学派

新古典派経済学は、当初から統一された1つの学派を形成していたわけではない

(ジェヴォンズとワルラスは知己になった)

メンガーの後継者: オイゲン・フォン・ベーム・バヴェルク, フリードリッヒ・ヴィーザー

→ ウィーン大学を中心にオーストリア学派(ウィーン学派)を形成

ワルラスの後継者: ヴィルフレド・パレート

→ ローザンヌ学派

ジェヴォンズは46歳で没, そのため直接の後継者はいない

→ フィリップ・ヘンリー・ウィクステード, フランシス・エッジワース, ライオネル・ロビンズなどが発展的に継承

イギリスでは、ジェヴォンズの系譜以上に、ケンブリッジ大学のアルフレッド・マーシャル(Alfred Marshall, 1842–1924)の影響が絶大であった『経済学原理』1890年 → 限界革命の1人には数えられない

しかし、イギリスにおける限界革命の定着は、マーシャルを中心とするケンブリッジ学派によって果たされた

⇒ 限界革命の3大学派: オーストリア学派, ローザンヌ学派, ケンブリッジ学派

——水とダイヤモンドのパラドックス——

なぜダイヤモンドは水より高価なのか

人間にとって、ダイヤモンドより水のほうが重要

ダイヤモンド1個の製造に投入される労働量と水1杯の供給に投入される労働量は極端に違わない

- 限界効用

価格の高低を決めるのは、財の有用性や投下労働量ではなく、その財の希少性

水の摂取量が、1杯、2杯、3杯と増えていくにつれて、ありがたみは低下していく

最後の追加分に感じる満足感を限界効用と表現した(ヴィーザー)

水のように大量に存在する財は「最後の追加分」が絶えずあらわれてくるため、限界効用が小さくなる

ダイヤモンドのように数が限られている財は、生存にとって有用であろうとなかろうと、限界効用は大きく、高い価格でも受け入れられる

新古典派の価格理論は効用価値論と呼ばれる

——メンガーの効用価値論——

財1	財2	財3	財4	財5	財6	財7	財8	財9	財10
10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
8	7	6	5	4	3	2	1	0	
7	6	5	4	3	2	1	0		
6	5	4	3	2	1	0			
5	4	3	2	1	0				
4	3	2	1	0					
3	2	1	0						
2	1	0							
1	0								
0									

Table 1: メンガー表

財1から消費を開始する

6個の財を選択できるとする。どの財を何個ずつ選択するか？

効用を最大化するためには、すべての財の限界効用が等しくなるように選択する

ただし、各財の価格の違いを考慮していないので、議論としては不十分